

近世音資料における果撮一等(舌歯音)の扱い

中村雅之

1. 概況

「歌」「果」「多」「朶」「左」「坐」などの果撮一等字の韻母は、現代の北京においては牙喉音開口で[-ɤ](/-ə/)、その他の場合に[-uo](/-uə/)であるが、南京においては開合の区別なく[-o]である。このような状況は果たして元明清を通じて同様であったのか。その判断を下すに当たっては、各種の対音資料の状況を検討することが必要となる。簡単な対照表を示すと以下の通りである。(と は南京官話の資料)

	歌	果	多	朶	左	坐
①パスパ文字(蒙古字韻など1. 13-14世紀)	go	gūo	do	dūo	jo	cūo
②中原音韻(楊耐思の推定音。14世紀)	ko	kuo	tuo	tuo	tsuo	tsuo
③洪武正韻訳訓(ハングル。15世紀)	ge	gue	de	de	je	jjue
④老朴左側音(ハングル。16世紀)	ge	gue	de	de	je	jjue
⑤老朴右側音(ハングル。16世紀)	ge	go	do	do	jo	jo
⑥西儒耳目資(ローマ字。17世紀)	ko	ko/kuo	to	to	ço	ço
⑦清書千字文(満洲文字。17世紀)	g'o	g'o	do	(do)	dzo	dzo
⑧増訂清文鑑(満洲文字。18世紀)	ge	g'o	do	do	dzo	dzo

ここで問題となるのは のパスパ文字資料と のハングル資料における舌歯音の扱いである。 では舌歯音も全て開合を区別しており、 では歯音において開合の区別がある。他の資料ではいずれも現代北京音と同様、舌歯音に開合の対立はない。 において、牙喉音でも開合の対立が不明瞭なのは南京官話の特徴である。

2. 解釈

上の状況については、元代における体系を と見るか と見るかによって、二つの解釈があり得る。

その一は、元代北方音が におけるように、舌歯音を含め、全て開合を区別する体系であったと考えるもので、明代に入ってから、まず舌音において開合の区別を失い( ) 次いで のように現代音と同様の体系になったということになる。その場合、 の中原音韻は特殊事情(他方言の流入など)により、舌歯音の開合を区別していないのだと見なすことになる。

その二は、 のように、元代においてすでに舌歯音における開合の区別はなかったと考える立場である。その場合には、 および が舌歯音の開合を全部または一部分別しているのは現実の音声を反映しない、何らかの特殊な事情によるものということになる。

ここでは第二の解釈を採用するのが妥当だという立場で説明を試みたい。もしも第一の

解釈によるならば、中原音韻の北方音的性格に疑問を投げかけざるを得ないというのが最も問題となる点であるが、そのほかに、<sup>10</sup>において、なぜ舌音が非円唇（開口）に合流しているのかという点も問題である。現代の北方方言で<sup>11</sup>のような分布を示すものはほとんど見当たらない。

第二の解釈ではどうなるか。<sup>12</sup>の『中原音韻』が現代北京語と同様の状況にあることから、元代以来北方音の状況は果摂一等に関しては不変であったと考えることができる。そして<sup>13</sup>のパスパ文字資料で舌歯音の開合を区別しているのは、当時の実際の音声を反映したものではなく、韻図などの伝統的な情報に基づいて理論的に作られたものであるということになる。パスパ文字は声母や韻尾について実際の音声を反映しない部分があることがすでに知られており、果摂一等舌歯音の介音についても同様に見なしてよい。

残る問題は、<sup>14</sup>のハングル資料で、舌音に開合の区別がないのに歯音にはあること、さらに舌音が全て非円唇（開口）で記されていることであるが、これについては伝来の字音の影響を考慮することによって説明が可能である。河野六郎「朝鮮漢字音の研究」(『河野六郎著作集 2』所収、1979)によれば、伝統的な朝鮮漢字音では果摂一等の舌音字は合口に由来するものも含めて全て「-a」であり、「-oa」とは結合しない。これに対して、歯音では開合の区別が「-a」と「-oa」で明瞭になされる。(開口由来の「左」はなぜか「joa」であるが、これは完全に例外的な事例である) したがって、『洪武正韻訳訓』やそれを間接的に踏襲した『老乞大』『朴通事』の左側音は、当時の実際の北方音では区別のなかった歯音の開合を、伝来の字音に影響されて、理論的にあるべき姿として表現したものであろう。舌音が全て開口扱いになっていることも、それによって説明できる。同じハングル資料でも、<sup>15</sup>の『老乞大』『朴通事』右側音は、崔世珍が自らの耳で聞いた当時の北方音を記したために、『中原音韻』や現代北京音と同様の状況が見られる訳である。

### 3. まとめ

果摂一等については、現代と同様の状況がすでに元代には存在した。すなわち、北方では、牙喉音のみ開合の区別があり(おそらく[-ʏ]と[-uɔ])、舌歯音は全て合口([-uɔ])であった。南京音については元代の状況は不明であるが、明清においては、やはり現代と同様に牙喉音も含めて開合の区別なく、全て[-o]であったと考えてよい。